

令和 4 年度 学校教育自己診断 [報告]

【教職員用】・【保護者用】・【児童生徒用】 令和 4 年 12 月実施

報告日：令和 5 年 2 月 22 日

大阪府立中央聴覚支援学校

令和4年度学校教育自己診断報告

学校教育自己診断は、学校の教育活動が幼児児童生徒の実態や保護者の学校教育に対するニーズ等に対応しているかどうかについて、アンケートに基づいて診断し、本校教育改善のための方策を明らかにするものである。

本校では、「そう思う」「だいたいそう思う」を肯定的評価、「あまり思わない」「思わない」を否定的評価として、今後の方策について検討する。

1 教職員アンケートについて

全項目で肯定的評価が前年度を上回った。今年度は「ウイズコロナの状況下でやり続けることができること」を方針として教育活動を行った結果、感染対策は必要なものの、かなりの教育活動が以前のようにできるようになったことによるものと考えられる。肯定的評価のうち「そう思う」の割合は12項目中8項目で10%以上増加している。教職員各自が、コロナ禍3年目の中でできるよりよい教育について追求し、努力研鑽を行ってきた自負が現れていると考える。

なお、項目7については前年度までの「いじめ」に特化した質問ではなく、より広く教育相談体制について問う項目としている。

個別に分析した以下の各項目の左に記した◎○△は、各項目の肯定的評価度を表している。

◎ー肯定的評価がととも高い。

○ー肯定的評価が高い

△ー肯定的評価が前年度より減少した。

- ① 項目1 「学校の教育活動について、教職員で日常的に話し合っているか」 (○)
R4 (86%) R3 (83%) +3%

業務量の増大により負担感も増している中で、なんとか日常的な話し合いの時間を確保しようと努めたと思われる。新型コロナウイルス感染症の流行以降、これまでとは大幅に行動が制限される中で日常の業務に従事せざるをえない日々が続いたが、学部間の連携の必要性を含めた教員同士の交流・研究活動・話し合いがやはり子どもたちの成長にとって重要であると考え、日常の話し合いを大切にしようと心がける教員が増えている。今後「働き方改革」の取り組みと併せ、日常的な連携をより充実させられるようにすることが大切である。

- ② 項目2 「学校は教育活動全般にわたる評価を行い、次年度の計画に生かしている」 (○)
R4 (75%) R3 (69%) +6%

内訳を見ると「そう思う」においての増加が5%と顕著となっている。本校では、まず「学校経営計画」において学校としての教育目標を明示し、各教員はこれをもとにして日々の教育活動に取り組んでいる。「学校経営計画」は年度途中で中間評価を行い、進捗状況を皆で確認を行い、年度末に最終評価を行っている。そして、この最終評価を基にして次年度の学校経営計画を策定している。今年度は、教職員それぞれが学校経営計画の進捗を意識しながら、その実現に向けてチームで取り組めたのではないかと考える。本評価の集計結果からその取組を振り返り、教育実践のさらなる充実をめざしていきたい。

- ③ 項目 3 「学校は諸活動において防災に関する取り組みや安全指導を行っている」(○)
R4 (91%) R3 (90%) +1%

項目 3 は昨年度からの新規新設項目である。近年、東南海トラフ地震への警戒が高まるなど防災についての備えは各校において最重要課題の 1 つとなっている。本校は SPS 認証を受けるなど防災等に向けた教育についても力を入れているところである。肯定的評価のうち、「そう思う」が 9% 増となっており、今年度の取り組みが充実したものであったことがうかがえる。担当分掌を中心とした積極的な取り組みの成果が実ったと考えられる。

- ④ 項目 7 「学校は教育相談体制が整備されており、幼児・児童・生徒は学級担任以外の教職員とも相談することができる」(○)
R4 (78%) R3 (67%) +11%

項目 7 については、前年度までの「いじめ」に特化した質問ではなく、より広く教育相談体制について問う項目とした。前年度との比較は難しいものの、肯定的評価の割合が非常に高く、校内の教育相談体制が担当分掌を中心に、きめ細かく展開されたことがうかがえる。

- ⑤ 項目 11 「私は、前年度より必要な視覚支援や ICT 機器を活用した授業を行い、専門性を向上させることができた。」(◎)
R4 (78%) R3 (72%) +6%

昨年度は肯定的評価が減少していたが、今年度は増加しており、肯定的評価のうちでも「そう思う」については 10% の増加となっている。オンライン授業実施準備、また GIGA スクール構想による幼児児童生徒一人 1 台端末配備に伴う今後の ICT 関連授業のあり方、本格的に運用が開始された Google for Education の使用について、徐々にではあるが教職員の理解と習熟が進んできたことが理由と考えられる。

急速に変化する時代の中で、子どもたちに育むべき資質・能力の一つとして、ICT 活用力は欠かせない。子どもたちに有効な活用を提示したり、ICT の活用によるわかりやすい授業で子どもたちの学ぶ力を育成できるよう、研修等を通じて指導者としての専門性の向上を図りたい。

- ⑥ 項目 13 「学校には、管理職と教育活動について話ができる機会や場がある。」(◎)
R4 (65%) R3 (54%) +11%

肯定的評価のうちでも「そう思う」が約 18% の増加と、「そう思う」の割合が非常に高く占める結果となっている。日頃より管理職は授業見学、校内巡回を行うと共に、様々な諸意見を丁寧に受け止める姿勢を示しているところである。今後も教職員の想いが管理職に伝わるよう組織づくりにより努めていく。

来年度は、幼児児童生徒数が今年度よりさらに減少することが予想されており、それに伴い教職員数も減少するため、業務量の見直しを図り、教職員の負担軽減をはかることも重要課題である。休憩時間の確保などに加え、業務内容やその分担についての見直しは引き続き次年度以降も改善に取り組む必要がある。

2 保護者アンケートについて

今年度は項目9において、一人一台端末（タブレット）に関する質問を新設している。この項目以外については、項目1、8以外のすべての項目において前年度から肯定的評価が増加しており、今年度の教育活動には、日頃からご理解をいただいていたことがうかがえる。

- ① 項目1 「お子さんは、学校へ行くのを楽しみにしている」 (○)
R4 (85%) R3 (84%) +1%

肯定的評価の内訳では「そう思う」が約9%増と、その内容については改善の傾向にあると考えられる。今後も教職員が協力しながら、幼児児童生徒が学校での学びを楽しみにできるよう、引き続き教育活動について検討を深めていく必要がある。

- ② 項目2 「お子さんは、授業が分かりやすく楽しいと言っている」 (◎)
R4 (77%) R3 (62%) +15%

一昨年度から昨年度については肯定的評価が8%減少していたが、今年度は大幅に増加している。またその内訳についても「そう思う」が約12%、「だいたいそう思う」が約3%の増加と、より肯定的な捉え方が増えている。ICT機器の増加にともない、そのさらなる活用の推進が望まれる。また授業が分かりやすく、楽しいものになるようより工夫を行っていくとともに、保護者にも丁寧な説明を行っていく必要がある。

- ③ 項目4 「学校や先生たちは、将来の進路や職業などについて適切な指導を行っている」 (◎)
R4 (77%) R3 (66%) +11%

肯定的評価のうち「そう思う」が20%と大幅に増加している。キャリア教育の観点から、全学部学年を通じた系統的な取り組みが少しずつ実りはじめていると思われる。引き続き、この観点を大切にしたい取り組みを継続し、子どもたちが自らの将来像を肯定的に捉えられるよう、支援する姿勢が求められる。

- ④ 項目5 「学校や先生たちはいじめや子どもが困っていることがあれば真剣に対応してくれる。」
R4 (83%) R3 (72%) +11%
項目6 「学校や先生たちは、お子さんに生命を大切にする心や社会ルールを守る態度を養おうとしている」
R4 (93%) R3 (79%) +14%
項目7 「学校や先生たちは、教育の情報について提供の努力をしている。」 (◎)
R4 (86%) R3 (79%) +7%

肯定的評価のうち「そう思う」と回答した割合が、項目5では18%、項目6では27%、項目7では約16%と大きく増加している。今年度の取り組みを通じて、人権を何よりも尊重しようとする学校の方針について、保護者の方にも理解がより広がっていると思われる。また、積極的な情報発信の姿勢についても評価をいただいている。引き続き障がい理解や人権を大切にしたい指導に取り組み、教育に関する情報発信にも注力して

いきたい。

- ⑤ 項目 8 「学校の授業参観や学校行事に参加したことがある。」 (○)
R4 (92%) R3 (92%) ±0%

肯定的評価の内訳において、「そう思う」が約8%増加している。コロナ禍において来校が制限されていた状況から変化しつつあり、可能な限り来校していただけるように取り組んできている。今後も感染症への対応に変化が予想されるため、状況に応じて多くの保護者に来校していただく機会について引き続き検討していきたい。

- ⑥ 項目 9 「学校や先生たちは、一人一台端末(タブレット)を積極的に活用している。」
R4 (67%)

時代の趨勢として求められている ICT 技術を活用した学びの充実について、学校の取り組みを保護者に評価してもらうため、今年度新設した項目である。

否定的評価は8%にとどまったが、「わからない」が約25%であった。今後、授業での活用を増やしていくことや、子どもたちがタブレットを用いた家庭学習を日常的にできるように、取組みをさらに進めていきたい。文部科学省が提供するメクビット等のサービスも活用するなど、研修等で教職員がさらに ICT を活用した学びを充実させるスキルを高め理解を深めたい。

3 児童・生徒アンケートについて

今年度は児童用と生徒用を分け、児童用の項目の質問文をより平易な表現とすることで、児童にとってわかりやすく回答しやすい形に変更した。また、項目9として、一人一台端末(タブレット)に関する質問も新設している。

以上のことから、前年度までとの単純比較は難しいが、概ね共通する項目については、例年と同様に肯定的意見が多い。

- ① 項目 1 「学校に行くのが楽しい」 (△)
R4 (74%) R3 (79%) -5%

肯定的評価については「そう思う」が3%以上向上しているのに対し、「だいたいそう思う」が8%減少している。小学部児童において「楽しい」と感じている子どもが多いが、中学部・高等部では、友人関係・進路等で不安を抱えるケースも少なくないと思われる。「楽しい」という表現のみで自らの学校生活を表現することにためらいの感情が生まれる年齢期であり、それらの葛藤に寄り添い、ていねいにその声を聞き取っていくことができるよう、教職員が連携して見守っていく必要がある。また、そうした寄り添いを教職員がゆとりを持ってできるよう、何より教職員自身が楽しんで仕事に取り組んでいる様子を子どもたちに提示できるように、働き方改革も進めていく必要がある。次年度以降、中学部・高等部の生徒には、学校生活の充実という観点で尋ねてみることも検討したい。

- ② 項目 2 「授業が分かりやすく楽しい」 (○)
R4 (80%) R3 (75%) +5%

肯定的評価では「そう思う」というより積極的な肯定が3%増加している。個々の教員のたゆまぬ日々の教材研究等の努力の成果だと思われる。引き続き視覚教材やICT機器の活用推進、また授業が分かりやすく、楽しいものになるようより工夫を行っていく必要がある。

- ③ 項目 3 「先生は私たちのことを大切にしている」 (○)
R4 (76%) R3 (73%) +3%

積極的な肯定評価については、ほぼ同じであるが、「だいたいそう思う」がやや増加している。教員アンケートでも、この関連項目は肯定的評価が増加している部分である。子どもたちが「大切にされている」と実感できるよう、教員がよりゆとりを持って一人ひとりの児童生徒に向き合い、気持ちに寄り添った丁寧な指導や支援を大切にしていく。また、ゆとり時間の確保のためにも業務量の調整や働き方の見直しも含めて進めていきたい。

- ④ 項目 4 「将来の進路や生き方について考える機会がある」 (◎)
R4 (77%) R3 (60%) +17%

肯定的評価のうち、特に「そう思う」というより積極的な肯定評価においては20%の増加となっている。授業や特別活動や行事の中で取り組みの目的が子どもたちに伝わり、それが自己の将来像を広げることにつながっていると、子どもたちが感じている成果だと思われる。その活動の目的を子どもたちにより明確に伝え、引き続き、取り組みを進めていきたい。

- ⑤ 項目 6 「担任の先生以外にも他のクラスや保健室等で、気軽に話ができる先生がいる。」 (◎)
R4 (69%) R3 (60%) +9%

より肯定的評価である「そう思う」で10%増となっており、教員用の関連項目でも、10%の増加が認められる。学級を越え、多くの教職員が連携して子どもたちの悩みに応えようとしている姿勢や、日常の関係性を大切にしていることが子どもたちにも実感されていると思われる。子どもたちが悩みを抱えた時、それを受け止め、チームで見守ることができる教職員集団が構築できるよう、さらに協力を深めていきたい。

- ⑥ 項目 9 「授業や学年活動でタブレットを使うことがある。」
R4 (86%)

項目 9 は今年度新設の項目である。児童用では、肯定的評価が94%であり、積極的に学習にタブレット機器を取り入れている様子がうかがわれる。生徒用における肯定的評価は78%であった。今後、よりICT機器を活用した学習活動を行っていくことにより、子どもたちにとってわかりやすく、また自ら学びをすすめる力を向上させることができることが求められる。教員自らが指導力の向上を図れるような工夫を引き続き

き行っていきたい。

- ⑦ 項目 10 「先生の話（声・口形・手話・指文字など）は分かりやすい。」 (◎)
R4 (91%) R3 (86%) +5%

特に、肯定的評価のうち「そう思う」が昨年度より 14%増加した。引き続き、今後も継続的に研修会等を開催し、教職員の手話の技術向上に努めるとともに、子ども一人ひとりの理解力、実態に応じた表現方法の工夫をさらに積み重ねていく。

- ⑧ 項目 11 「先生は私たちの障がいについてよく理解してくれている」 (○)
R4 (84%) R3 (81%) +3%

肯定的評価のうち、「そう思う」が 11%以上向上しているのに対し、「だいたいそう思う」が約 8%減少している。引き続き一人ひとりの子ども達を大切に、それぞれのニーズに寄り添った教育を進めていきたい。

4 教職員・保護者比較について

教職員アンケートと保護者アンケートの質問項目のうち、内容が近い項目について比較検討したものを記載する。

① 進路指導に関する項目

進路指導について、教職員の肯定的評価が 9 割であるのに対し、保護者の肯定的評価は 8 割弱と約 1 割弱の差が出ているが、これは一昨年度、昨年度が約 2 割であったことを考えると、教職員と保護者の捉え方についても開きが小さくなっていることがわかる。それぞれの肯定的評価が増加していることも併せ、進路指導やキャリア教育について、本校の取り組みへの理解が進んでいることがうかがわれる。

「保護者とともにすすめるキャリア教育」を意識して、個別懇談会、見学会等により具体的な情報を提示しながら、保護者の想いに寄り添いつつ、引き続き協力して取り組んでいく。

② いじめに関する項目

いじめに関する指導については、肯定的評価は教職員、保護者とも 8 割強であり差がない。また、それぞれ前年度が 8 割弱であったことを考えると、この面においても学校の取り組みについて肯定的な評価が進んでいるととらえられる。

いじめ問題に関しては、外部専門家による研修を取り入れるなどして、さらに積極的に取り組み、子ども間の小さなトラブル等を察知する力を伸ばすとともに、教職員が組織的に対応できる力を伸ばしていきたい。また、いじめ問題に関連する教育は、教科学習時、総合的な学習や道徳、生活指導時等はもちろん、学校活動の全ての場面で指導を行っているが、そのような学校としての取り組みを保護者に情報提供していきたい。

③ 教育情報に関する項目

教育の情報提供について、教職員の肯定的評価が 8 割弱であるのに対し、保護者の肯定的評価は 8 割強であった。前年度、教職員の肯定的評価が 6 割強、保護者の

肯定的評価は7割強だったことを考えると、その差が縮まっていることとともに、それぞれに肯定的評価が向上していることがわかる。前年度の結果を踏まえ、ブログの充実など情報発信に努めたことにより、特に教職員の意識が向上していると思われる。

日々の連絡帳や学年だよりをはじめとする学校からのさまざまな便りなどの組織としての情報も充実させるとともに、学校・保護者相互の情報のやりとりについて、より円滑かつ効率的に進めることができるよう、手段の検討についても今後進めていきたい。

④ 障がい理解に関する項目

障がい理解について、教職員、保護者ともに9割強が肯定的評価を行っている。前年度は教職員、保護者とも肯定的評価が8割～9割であったので、この面においてもさらに向上したことがわかる。引き続き校内外の研修機会や研究会等の紹介などを通して理解を深めていきたい。

⑤ 人権に関する項目

人権尊重について、教職員、保護者とも9割強の肯定的評価を行っている。この面においても、前年度が教職員、保護者とも肯定的評価が8割～9割であったので、人権意識が向上したととらえられる。教職員において、「そう思う」が14%増加しており、日常の取り組みの中で、人権を尊重した教育について意識がされていたことがわかる。引き続き今後も子どもたちの人権を尊重した教育活動を行っていきたい。

⑥ ICT（タブレット）を活用した学びの充実に関する項目

肯定度 教職員 78% 保護者 67%

教職員では視覚支援や ICT 機器を活用した専門性の向上について問い、保護者にはタブレットの活用について問うているので、この評価の差について述べることはできない。ただ、急速に変化する時代の中で、子どもたちに育むべき資質・能力の一つとして ICT 活用力が求められている。その中で GIGA スクール構想、1人1台端末の配置があるので、まず教職員がタブレットの活用を熟知し、「個別最適な学び」「協働的な学び」「主体的な学び」を目標としてタブレットを活用できるように専門性を高め、子どもたちへその活用について示していきたい。